

東北アジア先史時代の生業活動

はじめに

ここで「東北アジア」と一括する地域は、中国河北省中部以北、内蒙古東南部以東、黒龍江流域以南を指す。この地域の先史時代土器は、深鉢型が基本であり、その大中小をもって器種とする点で広く共通性が認められる。また網漁に使用される石錘も小型偏平な礫の両横に刻み目を入れる「礫石錘」が一般的で、長江型錘や管状錘は先史時代にはその出土は認められない。アワ *Setaria italica*、キビ *Panicum miliaceum*、アズキ *Phaseolus angularis*、ダイズ *Glycine max* などの畑作栽培は営まれていたが、穀物栽培が生業の中心になることはなく、家畜飼育も決して盛んではなかった。シカ科の獣類を主たる対象とした狩猟が広範に行われ、内陸河川での漁撈活動が活発に営まれた。アムールイトウ *Hucho peeeyi*、コグチマス *Oncorhynchus keta*、チョウザメ *Acipenser schrenki*, *Huso dauricus* といった大型魚類を対象とした河川漁撈が内陸部では行われ、沿岸部ではオットセイ *Callorimus urusinus*、アザラシ *Phoca vitulina*、アシカ *Zalophus californianus*、イルカ *Dolphinidae* sp.、クジラ *Cetacea* sp. などの海獣類、それにサメ *Elasmobranchii* sp. やマグロ *Tunmus* sp. などの大型魚類が捕獲の対象とされた。

先史時代の東北アジアに変化が訪れるのは、青銅器時代に入ってからであり、煮沸具としての三足土器の登場に、中国先史文化の影響が端的に示される。しかし三足土器の分布は第二松花江以南、鴨緑江以西に限られ、黒龍江流域や韓半島には及んでいない。このことからすると東北アジアの西南部以外の地域は、伝統的な生活様式が持続していたことが窺えるのであり、稲作栽培や管状土錘による河川漁撈などの新しい生産活動は、新石器時代以来の住民により新しい生業として受け入れたことを表している。

ここでは先史時代の生業活動の実際について自然遺物を分析することによって明らかにしてゆきたい。

狩猟活動と家畜飼育

ここでは発掘された動物骨の分析がなされた、いくつかの遺跡をみて行くことにする。

左家山遺跡 吉林省農安県

松花江の支流伊通河の河岸段丘上に位置する新石器時代の集落址で3期の文化期に区分されて報告されている⁽¹⁾。第1期は $6755 \pm 115\text{bp}$ 、第3期は $4870 \pm 180\text{bp}$ の年代が示され、紀元前5000年から紀元前3000年にかけての温暖期に営まれた遺跡であることが知られる。この遺跡の動物遺存体は陳全家が調査にあたっている⁽²⁾。それによると家畜はイヌ6体、ブタ74体で、イノシシ *Sus scrofa* 76体、シカ科223体、キツネ41体、ヤギユウ15体、その他37体となっていて、シカ科の狩猟動物が約半数に達している。時期別に見ても大きな変化は認められず、シカ科の獣類が主たる狩猟の対象であったことが窺われる。キツネの数量が多いのは、主として衣服に供されたものであろう。

郭家村遺跡 遼寧省大連市

遼東半島先端部の渤海湾を望む台地上に形成された貝塚遺跡で、上層は $4180 \pm 90\text{bp}$ 、下層は $4870 \pm 100\text{bp}$ の年代が測定されている。下層ではシカ科 *Cervidae* が55.3%、ブタ *Sus scrofa domestica* が23.3%を占め、左家山遺跡よりも家畜の割合が多少増加しているものの、狩猟動物が大部分であることには変わりはない⁽³⁾。上層の龍山文化期末期と平行する時期になると、ブタは出土動物数の76.8%にも達し、しかも成人種が大多数を占めることから家畜飼育の全盛期であることが分かる。郭家村近隣の大嘴子遺跡（紀元前二千年紀）でもブタの占める割合が6割以上に達しするのに対してシカ科は2割を切っていることから⁽⁴⁾、遼東半島先端部の遺跡では紀元前二千年紀には本格的な農耕生活が営まれていたことが窺い得る。

ペスチャヌイ遺跡 沿海州ウラディオストック

ウラディオストック湾を望むペスチャヌイ半島の台地上に形成された紀元前一千年紀の集落址で、住居址の埋設土の中から多数の動物遺存体が採取されている⁽⁵⁾。ここでは家畜動物のイヌ *Canis familiaris* とブタが個体数で35.4%と36.3%をそれぞれ占め、シカ科の動物は2割にも達していないことが報告されている。シカ科の中でも大型のマンシュウアカジカ *Cervus elaphus* が多く捕獲されていることは、狩猟対象にも選別性が高まっていたことを表しているといえる。紀元前五千年紀のボイスマンⅡ遺跡では家畜動物にはイヌが僅かにみられるだけであり、紀元前四千年紀のサイサノフカ遺跡ではイヌ4個体とブタ1個体だけで半数以上はマンシュウアカジカやノロなどが占めることが明らかにされている⁽⁶⁾。これらのことは青銅器時代に大きな変革があったことを物語っている。

西浦項貝塚 咸鏡北道先鋒郡

雄基湾を望む丘の裾野に営まれた新石器時代から青銅器時代にかけてのカキを主体とする貝塚で、金信奎により詳細な動物遺存体の分析がなされている⁽⁷⁾。新石器時代の層では家畜動物としてイヌとブタが見られるが出土動物中で占める割合は1割にも満たない。シカ科は全体の半数以上を占め、アシカなどの海獣類が13%でシカ科が主要な捕獲対象であったことを示している。

青銅器時代の層ではブタがやや増加するも、イヌと併せた数は全体の1割未満であり、シカ科が44%、海獣類が約1割、イノシシが約17%となっている。これはシカ科の減少をイノシシで補っていることを物語る。西浦項貝塚では青銅器時代には既に農耕を開始しているにも拘らず、豊富な天然資源を目前にして狩猟活動が活発に行われていたことを表している。

西浦項貝塚の青銅器時代よりも遅れる時期の草島遺跡では、海浜に面する遺跡でありながら、ブタが3割近くを占め、イヌと併せて家畜動物が出土動物の半数に達することは、ペスチャヌイ遺跡と同様な初期農耕段階にあったことを意味している。

五洞遺跡・虎谷遺跡 咸鏡北道会寧郡

両方の遺跡とも豆満江中流域の河岸段丘上にある青銅器時代から鉄器時代の集落址で、青銅器時代では五洞遺跡の場合マンシュウアカジカ、ノロ *Capreolus capreolus*、イノシシとアナグマ *Meles meles* などの狩猟動物が大部分でブタとイヌは極く少数みられるだけであるが、虎谷遺跡ではブタが43%と極めて高い数値を示し、これとは反対にシカ科の獣類は4割弱とその比率が低下している。内陸部においては漁撈活動に依存する度合いが少ないだけに、

穀物栽培への依存度を高めていったことが窺える⁽⁸⁾。

立石里遺跡 平壤市勝湖区

青銅器時代末期の集落址ではブタは個体数で8.6%を占めているが、残りはすべて野生種である。野生動物の中ではアナグマ、タヌキ *Nyctereites procyonoides*、カワウソ *Lutra lutra* といった毛皮動物が骨数で36.37%を占めることであり、これにクマを加えると全体の2/3近くが毛皮供用動物となる。シカ科ではキバノロ *Hydropotes inermis* が8頭ニホンジカ *Cervus nippon* は4頭に過ぎない⁽⁹⁾。一般の集落址にしては動物遺存体の構成が著しいアンバランスを見せていて特殊な社会状況を想定しなければならないのであり、立石里が古朝鮮の中心部に位置することから、こうした動物毛皮が交易用の活動の所産であったと考えることができる⁽¹⁰⁾。

弓山里貝塚 平安南道温泉郡

広梁湾に面した新石器時代中期の貝塚遺跡で、弓山という小さな丘陵の東南部に位置し5軒の住居址が発掘されている⁽¹¹⁾。家畜動物としてはイヌ1頭だけであり、野生獣類の中ではキバノロが4割、ニホンジカが3割、イノシシは2割を占めている。シカ科の狩猟が大きい位置を占めているが、獣類の種類が少ないことが特徴的であり、これは漁撈活動への依存度の高さを物語るものと考えられる。

東三洞貝塚 釜山広域市影島区

釜山市の影島東部の入り江に営まれた新石器時代の貝塚で、60年以上も前から数回にわたる発掘がなされている。ここでは自然遺物が詳しく報告されているサンプルの調査報告を引用すると家畜動物は検出されていない⁽¹²⁾。海獣類が出土骨数で6割を占めるのが特徴で、陸上動物は4割であり、その中ではイノシシは1%と極めて少なく、マンシュウアカジカが全体の26.4%となっている。全体で4割を占めるに過ぎない陸上獣類の中でアカシカが3/4と選別的な捕獲が見られることは、海獣狩りが主要な生業であり、陸上動物はその補完対象であったことを表している。

朝島貝塚 釜山広域市影島区

釜山湾に浮かぶ影島の東1kmに小島があり、その海岸台地上に無紋土器時代後期貝塚が形成されている。ここではクジラ目、カワウソ、ニホンジカ、イノシシが捕獲されていて、中でもニホンジカは全体の8割を占めているのに対してイノシシは5%に過ぎない⁽¹³⁾。このためにこの遺跡の報告者は盤亀台岸壁面の木柵を利用しての動物飼育を例にとり、シカの飼育が行われていた可能性を説いている。小さな島であれば放し飼いで充分に棲息することが可能なことは、宮城県金華湾での事例で知ることができる。この島に元来は棲息しないカワウソなどがみられることは、朝島貝塚を営んだ住民たちは、多量に捕獲したシカを一時的にこの小島に放し飼育 (keeping) をしていたことが充分に想定できる。

同様な現象は靉島をはじめとする韓国南海岸地域の原三国期でも認められ、多量のニホンジカが検出されている。

以上東北アジア先史時代の遺跡から検出される動物相からは、中国東南部地方ではブタの家畜が新石器時代当初からみられ、青銅器時代に入り本格的な家畜飼育が開始されることが分かる。一方東北アジア北部地域では青銅器時代になりブタ飼育が始まり、鉄器時代に本格化する

る。韓国では東北部や西北部地域で新石器時代の後半以降ブタ飼育がはじまるが、本格化するのは鉄器時代に入ってからであり、韓国南部では初期鉄器時代にならないと明確な家畜飼育の証跡は掴めない。沿岸部の遺跡では海獣狩りを含めた漁撈活動が活発であり、家畜動物はその補完的な役割しか担っていないことが窺われる。ブタにしても極めて少数で、しかも野性的な形質が残されていることが指摘されていて⁽¹⁴⁾、狩猟生活に対する依存度の高さを表している。

漁撈活動

東北アジアの漁撈活動は内陸河川流域と遼東半島部、韓国東北地域から沿海州沿岸と韓国南海岸地域でそれぞれ特色が見られる。

東北アジア内陸部

東北アジア内陸部の河川流域の遺跡で発見される漁撈具には刺突具の他に、網漁と鉤漁に地域的特色が認められる。網漁に使用される錘は土錘と石錘で、黒龍江省東康遺跡では住居の床面から18点の土錘と1点の石錘がまとまって検出されていて⁽¹⁵⁾、これが同一の網に使用されたことを物語っている。土錘と石錘で構成される赫哲族の網に使われる錘の間隔を参考にすると⁽¹⁶⁾、東康遺跡の網は長さが5.1mに復元できる。東康遺跡では4軒の住居址が検出されていて、そこから出土する錘は石錘7点、土錘142点で、18点か19点に1点の割合で土錘が使われていた計算になる。すると各住居址では平均して2振りの網が保持されていたとも想定できるが、これらを繋ぎ合わせても10mほどにしかならず、大河川での網漁には不十分である。従ってこの地域での網漁は河川沿岸部や洪水でできた氾濫場所（泡）での中型魚の捕獲に供されたことと想定できる。

この地域で特色ある漁撈具は回転離頭鉤で、これまでに14遺跡から発掘されている⁽¹⁷⁾。この地域の先史時代遺跡からはこれまでにコイ、アオウオ、ソウギョ、ハス、ケツギョ、サケなどの大型魚が検出されている。この回転離頭鉤が何を対象とした漁具であるか考察するときに、豊富な文献史料を参照するとチョウザメが第1候補として挙げられる⁽¹⁸⁾。これ以外にも民族誌ではソウギョやコイがあり、遺跡から検出される大型魚も回転離頭鉤で捕獲されたことが考えられる。黒龍江流域は長江流域に次いで魚種の豊富な河川であり⁽¹⁹⁾、通年的に漁撈活動が行われていたとする文献史料や、漢書遺跡⁽²⁰⁾などでかなりの厚さに魚骨の堆積層がみられることなどを念頭におくと、先史時代においても漁撈に依存する度合いが高かったことは容易に窺えよう。

韓国東北部から沿海州地域

この地域においては海獣狩りが卓越することは出土動物相で示される。これまでに知られた海獣としては、ゴマフアザラシ、トド、アシカ、オットセイなどがあり、これ以外にはスナメリ、セミクジラ、イルカなどの海に棲息する大型哺乳類が豊富に認められる⁽²¹⁾。

先述した西浦項貝塚では全出土哺乳類の中で、新石器時代層でこれらが13%、青銅器時代層では12%をそれぞれ占めるほどである。得られる肉量を考量するとき、すくなくとも冬季から春季にかけての時期にはこれら海産哺乳類が主たる生業活動であったことは容易に頷ける。この地域では単式釣針の出土数はさほど多くは無く、量的に多く発掘されるのは回転式離頭鉤と結合式釣針である。回転式離頭鉤は海獣狩りに使用され、結合式釣針はサメ類やブ

りなどの大型魚を対象にトロール漁するものであった⁽²²⁾。

遼東半島地域

遼東半島地域では多様な漁撈具が展開していた。刺突具以外には、単式釣針、結合式釣針、逆T字形釣針、回転式離頭銚、網具などがみられる⁽²³⁾。この地域で出土した魚類には、サワラ、ヒラメ、アカエイ、チョウザメ、アンコウ、スズキ、サバ、フグなど多種類に及ぶ点に特徴が見られる。この地域で発達をみせる漁撈具は逆T字形釣針で、大嘴遺跡では52点、上馬石貝塚では42点と多量に纏まって発見されることがある。これは逆T字形釣針が延縄漁に使用されるものであり、沿岸部で棲息するスズキ、クロダイ、マダイなどが主たる対象であった⁽²⁴⁾。サワラなどの回遊魚やサメ類は結合式釣針で、イルカ、アザラシなどは回転式離頭銚で捕獲されたものであろう。

多く出土する土錘にも特徴が認められ、3～5 cmの楕円形をした管状土錘の表面に十字形に刻みがいれられ、強く緊縮するための処置が施されている。大嘴子遺跡では60点以上も発掘されていて、東北アジアの内陸河川地帯とは異なって、大型の網漁が営まれていた可能性を示唆している。

韓国南海岸地域

韓国の南海岸地域では漁撈具の分析が集中して行われていて、また自然遺物に関する報告も多く、多様な漁撈活動が展開したことが窺える⁽²⁵⁾。この地域で特徴的な漁具は組み合わせの石銚で、西北九州と同一の素材で作られている⁽²⁶⁾。その他の漁撈具としては結合式釣針、単式釣針、回転式離頭銚、逆T字形釣針、などがあり、中でも結合式釣針は草島型、鰲山里型、西北九州型と多種類に及んでいる。

この地域でこれまでに検出された海に棲息する哺乳類にはクジラ、カマイルカ、マイルカ、バンドウイルカ、ニホンアシカ、オットセイ、ゴマフアザラシなどがあり、大型魚類にはサメ、マグロ、サワラなどが見られる。また中型以下の大きさの魚類も、多数に及んでいて、豊富な漁撈資源が対象となっていたことを示している⁽²⁷⁾。

以上みてきた漁撈具は回転式離頭銚、組み合わせ銚などに見られる大型魚類あるいは海獣を対象とする寒流系漁撈具と逆T字形釣針に見られる暖流系漁撈具に分けることができる。前者は沿海州から韓国東海岸地域に見られるもので、北海道や東北部地域と共通する漁撈具であり、環日本海的な魚類や海獣を対象とする。これに対して後者は渤海湾や黄海沿岸地域に特徴的ないわば環東中国海沿岸地域的漁撈具であり、沿岸部に棲息するタイ類を対象とする漁撈具である。この両者が交わる韓国南海岸地域で、最も沿岸漁撈活動が活発であったことは言うまでもない。

採集活動

東北アジアは基本的にはリョウトウナラを指標とする落葉樹林帯に属している。この地域では堅果類を中心とした豊富な食性植物が天然に存在することは明らかではあるが、遺跡から検出された種類はあまり多くはない。これまでに知られた植物遺存体としては、中国東北部ではマンシュウグルミ、ハシバミ、モモがあるに過ぎない。韓国でも種が同定されたのはオニグルミだけであり、あとは「ドングリ」と一括されて報告されているものばかりである⁽²⁸⁾。ドン

グリとされたものも図版その他で確認されるかぎり、落葉系のもののみであり、従って食料とするには「灰汁抜き」を必要とする。韓国の「ムック」の伝統は少なくとも新石器時代にまで遡上することが知られる。

栽培穀物

東北アジアの先史時代の栽培穀物には、イネ、オオムギ、コムギ、アワ、モロコシ、キビ、ダイズ、アズキ、アサ、エンバクと一通り検出されている。これまでに知られた穀物出土遺跡をみると、イネの北限は北緯40°、畑作物のそれは北緯45°であり、これ以北では青銅器時代以前においては非穀物栽培地帯である⁽²⁹⁾。韓国南部地帯ではイネが単独に栽培された可能性が高いのに対して、中部以北の東北アジアでは複数の穀物が栽培されていたという特色が指摘できる。すなわち大嘴子遺跡ではイネとキビ、南京遺跡ではイネ、アワ、キビ、ダイズ、五洞遺跡ではアズキ、ダイズ、キビ、欣岩里遺跡ではイネ、アワ、モロコシ、オオムギなどが挙げられよう。また多くの遺跡ではマメ科の穀物が伴うがこれは土地の生産性を高めるためであり、畑作栽培地帯では通有のことである。

韓国遺跡出土のイネの場合、水稻であったか否かの検討は慎重を期す必要がある。南江ダム建設に伴う発掘により知られた河岸沖積地のうち大坪里遺跡では、イネ、アワ、キビとともにホモノ科やカタバミ科、アカザなどの種子が検出されていて、これら遺跡で栽培されたイネは畑作によるものであることが確認されたためである⁽³⁰⁾。イネが畑で栽培されていたのであれば、忌地現象が生じるために、連作は不可能であり、中間にマメ類を挟んで多種類の穀物を栽培しなければならない。東北アジア各地の先史遺跡で多種類の栽培穀物が一つの遺跡から検出されることはそのことを的確に表現しているといえよう。

石製農具の面からみると、調理具である磨臼と石皿は、東北アジア各地に広く一般的に分布を認めることができるとした有光教一の約半世紀前の指摘は今日でも正しい⁽³¹⁾。新石器時代段階では耕起具としての石鋤、収穫具である石庖丁も広くこの地域で発掘されている。異なっているのは石製農具の組み合わせで、松花江や豆満江流域での基本的道具は石鋤、石庖丁、擦臼と石皿のセットで構成されていて、中国の東北部や朝鮮西北部では新石器時代段階には、これらに石鋤が伴う組み合わせとなる。新石器段階では畑作栽培を基本とする農耕であっても、東北アジアの南部と北部ではこのように若干の違いを指摘することができる。大きく異なるのは、稲作栽培に関連するもので、基本的には収穫具としての石庖丁しか石製農具は摘出されない。石製農具は石庖丁だけで構成される類型は遼東半島の双聖子文化でも見ることができる。すなわち稲作栽培が開始されると、収穫具である石庖丁以外は脱落するのが通有の現象となっている。この双聖子文化には木製道具加工用の蛤刃石斧、扁平片刃石斧、有段・挟入石斧が一般的に伴うことから、石製農具から木製農具へ変化したことが窺える。

終わりに

新石器時代の東北アジアはリョウトウナラを主体とする落葉樹林帯が広く被っていて、食用となる動植物が豊富に分布していた⁽³²⁾。これらの天然の分布にあわせて、松花江流域ではシカ科を中心とする狩猟と河川漁撈活動に重点をおき、それらに補完的に畑作栽培やブタ飼育が行

われていた。東北南部の内陸地域では漁撈活動はさほど活発ではなく、畑作栽培と家畜飼育に重点をおいた農耕が展開し、狩猟もシカ科動物の一部を選別的に捕獲する類型がみられる。遼東半島部の地域では沿岸漁撈と狩猟、畑作栽培が広く行われ、新石器時代後期にはブタの飼育が盛んに行われていたが、紀元前二千年紀の双聖子文化段階になると畑作栽培に稲作が加わって、多様な生業活動が展開していった。韓国東北部と沿海州地域では海獣狩りを基本とした狩猟漁撈活動が盛んで、畑作栽培や家畜飼育はあまり活発ではなかった。韓国南部の沿岸地域では新石器時代では狩猟・漁撈活動が生業の中心で、紀元前一千年紀に畑作栽培と稲作栽培が行われるようになったが、家畜飼育はあまり重要視されなかった。

韓国でどの段階から稲作栽培が開始されたかという問題に関しては、確実な出土例からは南京遺跡や欣岩里遺跡の事例から紀元前二千年紀後半期とすることができる。しかし遼東半島で稲作栽培の出現が確認される双聖子文化の影響は、新石器時代の後期の新岩里遺跡でも認めることができ、韓国の西北地域においては紀元前二千年紀初めに遡上することは確実である。また紀元前四千年紀に遡って遼東地域と韓国南海岸地域で共通する文物が発見されることは、稲作栽培に先行して一定程度の畑作が営まれていた可能性は高い。今後の発掘調査において、水選別装置などの導入によって植物遺存体の検出が待たれるのである。

注

- (1) 吉林大学考古教研室「農安左家山新石器時代遺址」『考古学報』1989年2期。
- (2) 陳全家「農安左家山遺址動物骨格鑑定及痕跡研究」『青果集』1993年。
- (3) 傅仁義「大連郭家村遺址の動物遺骨」『考古学報』1984年3期。
- (4) 大連市文物考古研究所『大嘴子』2000年。
- (5) オクラドニコフ『ウラディオストックのペスチャヌイ半島にある古代集落』1963年。
- (6) ジェルベフ他『ピョートル大帝湾の最初の漁撈民』1998年。
- (7) 金信奎「朝鮮考古研究」1990年3期。
- (8) 金信奎「我が国の原始遺跡にみられる動物相」『考古民俗論文集』Ⅱ、1970年。
- (9) 注(8)に同じ。
- (10) 甲元眞之「朝鮮の初期農耕文化」『考古学研究』20巻1号、1973年。
- (11) 朝鮮民主主義人民共和国科学院考古学及民俗学研究所『弓山原始遺跡発掘報告』1957年。
- (12) Sample, L. L. Tongsamdong A Contribution to Korean Neolithic Culture History. *Arctic Anthropology*. Vol. X I-2, 1974.
- (13) 国立中央博物館『朝島貝塚』1976年。
- (14) 注(8)に同じ。
- (15) 黒龍江省博物館「東康原始社会遺址発掘」『考古』1975年3期。
- (16) 凌純声『松花江下游的赫哲族』1934年。
- (17) 甲元眞之「東北アジアの先史時代漁撈」『熊本大学文学部論叢』第45号、1994年。
- (18) 注(17)に同じ。
- (19) 西村三郎『日本海の成立』1974年、築地書館。
- (20) 吉林大学歴史系考古専業・吉林省博物館考古隊「大安漢書遺址発掘報告」『東北考古与歴史』第

1 輯、1982年。

- (21) 甲元眞之「環東中国海沿岸地域先史時代動物遺存体集成」甲元眞之編『環東中国海沿岸地域の先史文化』1998年。
- (22) 甲元眞之「先史時代の対外交流」岩波講座『日本社会史』第1巻、1987年。
- (23) 甲元眞之「環東中国海の先史漁撈文化」『熊本大学文学部論叢』第65号、1999年。
- (24) 甲元眞之「黄・渤海周囲地区的史前時期漁撈」『環渤海考古学術討論会論文集』1996年。
- (25) 申叔静『我が国南海岸地方の新石器文化研究』1994年、金建沫『韓半島の原始・古代漁業』1995年。
- (26) 山崎純男「西北九州漁撈文化の特性」『季刊考古学』第25号、1988年。
- (27) 注(21)に同じ。
- (28) 沈報謹「韓国出土先史時代植物遺存体集成」甲元眞之編『環東中国海沿岸地域の先史文化』第3編、2000年。
- (29) 甲元眞之「東アジア先史時代遺跡出土穀物地名表」甲元眞之編『環東中国海沿岸地域の先史文化』1999年。
- (30) 嶺南考古学会『南江ダム水没地区の発掘成果』1998年、南江遺跡発掘調査団『南江先史遺跡』1998年。
- (31) 有光教一「朝鮮石器時代のすりうす」『史林』第35巻4号、1953年。
- (32) 佐々木高明「ナラ林文化考」『日本人と日本文化の形成』1993年。

国立歴史民俗博物館2001年3月24日